

氏 名	大塚 恵理		
授与した学位	博 士		
専攻分野の名称	歯 学		
学位授与番号	博甲第5135号		
学位授与の日付	平成27年3月25日		
学位授与の要件	医歯薬学総合学研究科社会環境生命科学専攻 (学位規則第4条第1項該当)		
学位論文の題目	臨床経験がもたらす患者－研修歯科医間のコミュニケーションの変化		
論文審査委員	仲野 道代 教授	岸本 悦央 准教授	鳥井 康弘 教授

学位論文内容の要旨

【緒言】

近年、歯科医療においても医療コミュニケーションの重要性が認識され、その教育が組み込まれるようになってきた。しかし、歯科医師免許取得直後の歯科医師の医療コミュニケーションスキルがどの程度で一年間の初期研修でどのように変化していくかについての情報は極めて少ない。今後の歯科医師の育成において医療コミュニケーション教育にどのような改善、工夫が必要かを検討する上で、現状を把握することは大変重要である。そこで本研究では、研修歯科医を対象に慢性症状に不安を有する模擬患者(SP)との模擬初診時医療面接にて、研修開始時および修了時での医療面接の発話の内容と機能、正確な情報聴取に関与する現病歴に関する応答、また患者との良好な関係を構築するきっかけとしての患者の不安の把握について、The Roter Interaction Analysis System(RIAS)を用いて検討した。また、SPと指導歯科医からの研修歯科医の評価を研修開始時と修了時で比較検討した。

【方法】

平成23、24年度に岡山大学病院で初期臨床研修を行った研修歯科医66名に研修開始時および修了時に7分間で慢性症状に心理的不安を有した患者との設定のSPとの初診時医療面接を実施させ、その場面をビデオで撮影・記録した。その場で研修歯科医の面接内容をSP1名及び指導歯科医1名が評定尺度で評価した。また、医療者と患者それぞれの会話を「発話」という単位に区切りその内容と機能によってカテゴリーに分類する医療コミュニケーションの分析ツールであるRIASを用いて、録画したビデオから医療面接における全発話をカテゴリー別、内容別および機能別に分類し、研修開始時と修了時で比較検討した。さらに、現病歴に関する応答や患者の不安の把握に関する応答について詳細に調べた。なお、患者の不安の把握に関する応答では、RIAS分析結果でSPが発話した不安や心配に関するカテゴリーを参考とし研修歯科医がシナリオ設定内容について情報を聴取できたかどうかを調べることで検討した。

【結果および考察】

研修修了時は開始時よりも、指導歯科医評価では「発症の時期と症状」、「心配や不安の理解」、「応

答技術を活用」の項目で有意に向上したが、SP 評価では「心配や不安の理解」、「尊重する態度」の項目で有意に低下した。

コミュニケーション内容の RIAS 分析では、研修修了時は開始時よりも、研修歯科医、SP とともに歯科医学的状态に関する内容の発話が増加した。また、修了時では研修歯科医からは閉じた質問や確認が有意に増加し、SP からの治療法、生活習慣、心理社会的情報に関する応答や接続語は有意に減少した。

研修修了時では開始時よりも、制限時間内に現病歴聴取が終了した研修歯科医数が増加したが、時間内に現病歴聴取が終了した研修歯科医の現病歴聴取平均時間は研修開始時と修了時で同等であった。

SP から不安の内容を聴取できた研修歯科医数は研修修了時には有意に減少したが、聴取できた場合では研修修了時は開始時よりも「現病歴」の話の流れとして誘発される機会は減少し、両時期とも「意見の要請」により誘発される機会が最も多かった。

研修修了時には歯科医学的状态に関する内容がそれ以外の情報に比べ優先的に聴取されていることが示された。また、研修歯科医からは接続語や開かれた質問が減少し、確認や閉じた質問が増加していたことから、網羅的な情報収集から迅速な仮説と診断までの計画形成を行うという研修歯科医の思考プロセスにおける変化が推察できる。その結果、研修開始時および修了時で現病歴聴取時間に差がないにも関わらず、修了時では歯科医学的状态に関する応答の増加に伴って情報量が増加しており、手際よく医療面接が行われるようになったと考えられる。

その一方で、研修開始時に比べ修了時で SP の不安の具体的な内容を聴取できた研修歯科医が減少したこと、研修修了時での SP 評価は「心配や不安の理解」、「尊重する態度」の評価が有意に低下したことから、一年間の臨床研修による研修歯科医の経験や知識の増加は、患者の満足度を満たす方向には必ずしも向かっていないように見受けられた。研修修了時に診断に必要な情報を効率的に聞くことを最優先するようになった研修歯科医の対応は、患者にとっては事務的な態度で感情的な配慮を排除されたように感じられるもので、心理的不安や不安の内容に踏み込んだ話ができなかったため SP 評価が低下したと思われた。

【結 論】

研修歯科医は1年間の臨床研修を経験し、初診時医療面接において患者背景や心理的不安を探求するよりも病歴聴取を優先するようになることが明らかになった。さらに、質問と確認を多用したコミュニケーションを行うようになることから、手際よく医療面接を進めるように変化することが示された。一方、患者の不安や心配を把握することが重要視されないことで、患者との良好な関係構築の面で問題が生じる可能性が示唆された。本研究より、歯科医師としての知識や技術面での成長を導く現行教育とともに、より良い患者－歯科医師関係を構築するために心理社会的背景にまで配慮することも含めたコミュニケーション教育の必要性が認められる。

論文審査結果の要旨

近年、歯科医療に際して医療コミュニケーションの重要性が認識され、歯学部学生教育や卒後の歯科医師臨床研修においてその教育が組み込まれつつある。しかし、歯科医師免許取得直後の歯科医師の医療コミュニケーションスキルがどの程度であり、その後の一年間の初期研修でどのように変化していくかについての情報は極めて少ない。今後の歯科医師の育成においてどのような改善、工夫が必要かを検討する上で、現状を把握することは大変重要であろう。

本論文は、研修歯科医を対象として慢性症状に不安を有する模擬患者(SP)との模擬初診時医療面接を指導歯科医および SP が評価するとともに、医療面接での会話を研修開始時および修了時と比較し、医療コミュニケーションスキルがどのように変化するかを詳細に検討したものである。模擬初診医療面接における研修歯科医の対応を指導歯科医は 11 項目で、そして SP は 5 項目でそれぞれ 4 段階評価した。また、医療面接の発話の内容と機能、正確な情報聴取に参与する現病歴に関する応答、さらに患者との良好な関係を構築するきっかけとしての患者の不安の把握について、信頼性と妥当性が実証されているコミュニケーション分析方法である The Roter Interaction Analysis System (RIAS) を用いて詳細に分析した。

その結果、研修修了時は開始時よりも、指導歯科医評価では各項目で有意に向上したが、SP 評価では「心配や不安の理解」、「尊重する態度」の項目で有意に低下した。コミュニケーション内容の RIAS 分析では、研修修了時は開始時よりも、研修歯科医、SP とともに歯科医学的状态に関する内容の発話が増加し、研修歯科医からは閉じた質問や確認が有意に増加し、SP からの治療法、生活習慣、心理社会的情報に関する応答や接続語は有意に減少した。研修修了時では開始時よりも、制限時間内に現病歴聴取が終了した研修歯科医数が増加した。また、SP から不安の内容を聴取できた研修歯科医数は研修修了時には有意に減少した。

以上より、研修歯科医は 1 年間の臨床研修を経験し、初診時医療面接において患者背景や心理的不安を探求するよりも病歴聴取を優先するようになることが明らかとなった。また質問と確認を多用したコミュニケーションを行うようになることから、手際よく医療面接を進めるように変化することが示された。一方、患者の不安や心配を把握することが重要視されないことで、患者との良好な関係構築の面で問題が生じる可能性が示唆された。

本論文は、歯科医師としての知識や技術面での成長を導く現行教育とともに、より良い患者－歯科医師関係を構築するために心理社会的背景にまで配慮することも含めたコミュニケーション教育の必要性を示唆しており、今後の歯学臨床教育の立案、実施に際して有用な知見を与えるものとして評価できる。よって審査委員会は本論文に博士(歯学)の学位論文としての価値を認める。